

北野廃寺・北野遺跡

2017年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

北野廃寺・北野遺跡

2017年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、建物新築工事に伴う北野廃寺・北野遺跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

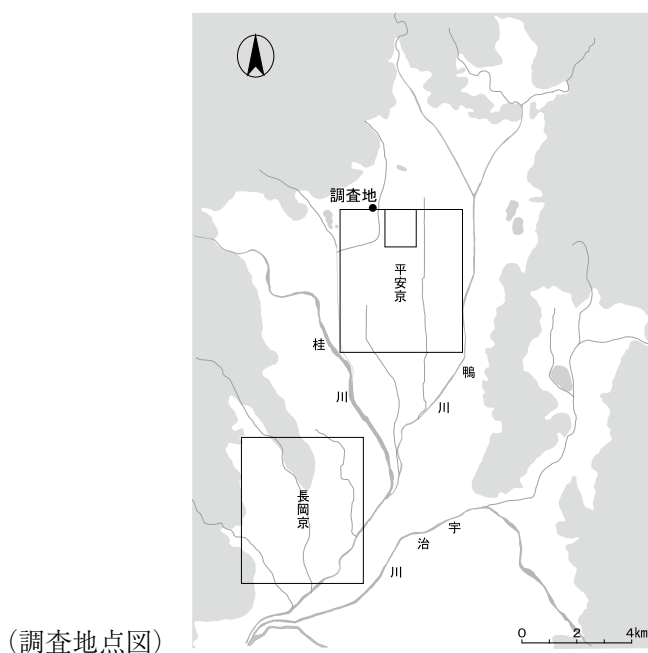
末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

平成29年8月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- 1 遺 跡 名 北野廃寺・北野遺跡（文化財保護課番号 16 S 064）
- 2 調査所在地 京都市北区北野下白梅町41番地
- 3 委 託 者 株式会社 京都銀行 取締役頭取 土井伸宏
- 4 調査期間 2017年2月15日～2017年3月31日
- 5 調査面積 181㎡
- 6 調査担当者 中谷正和
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「衣笠山」・「花園」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 中谷正和
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。



目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 調査の経過	1
2. 位置と環境	3
(1) 調査地の環境	3
(2) 既往の調査	3
3. 遺 構	7
(1) 基本層序	7
(2) 遺構の概要	7
(3) 第1面の遺構	9
(4) 第2面の遺構	9
(5) 第3面の遺構	12
4. 遺 物	15
(1) 遺物の概要	15
(2) 土器類	15
(3) 瓦 類	19
(4) 金属製品	19
5. ま と め	21

図 版 目 次

図版1	遺構	1	1区第2面全景（北から）
		2	2区第3面全景（北から）
図版2	遺構	1	井戸1（西から）
		2	建物110、柵113（東から）
図版3	遺物		出土土器類

挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：2,500）	1
図2	調査区配置図（1：500）	2
図3	調査前全景（南から）	2
図4	調査風景（南東から）	2
図5	周辺調査位置図（1：5,000）	4
図6	第1面平面図（1：60）	7
図7	調査区東壁断面図（1：60）	8
図8	溝77断面図（1：40）	9
図9	建物110実測図（1：50）	9
図10	第2面平面図（1：120）	10
図11	柵111～113実測図（1：50）	11
図12	第3面平面図（1：120）	13
図13	井戸1・土坑2実測図（1：50）	14
図14	井戸1出土土器実測図（1：4）	16
図15	土坑114・118・119出土土器実測図（1：4）	16
図16	3層・1層出土土器実測図（1：4）	17
図17	出土瓦拓影及び実測図（1：4）	18
図18	出土金属製品実測図（1：2）、銭貨拓影（1：1）	19

表 目 次

表1	遺構概要表	9
表2	遺物概要表	15
表3	土師器碗・杯・皿類の油煙付着状況	17

付 表 目 次

附表1	掲載土器類一覧表	23
附表2	掲載瓦類一覧表	24
附表3	掲載金属製品・銭貨一覧表	24

北野廃寺・北野遺跡

1. 調査経過

(1) 調査に至る経緯 (図1)

調査地は、京都市北区下白梅町41番地に位置する。『京都市遺跡地図』によると北野廃寺および北野遺跡にあたる¹⁾ここに計画された京都銀行白梅町支店新築工事に先立ち、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）が試掘調査を実施した。その結果、古代の遺構が良好に遺存することを確認したため、発掘調査の指導が株式会社京都銀行になされた。調査は株式会社京都銀行から委託を受けた、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が実施した。

(2) 調査の経過 (図2～4)

調査は、文化財保護課の指導により、敷地の東側に181㎡の調査区を設定した。調査区を南北2つに分け、平成29年2月15日から重機で北側の1区の表土掘削を開始した。1区は旧京都銀行白

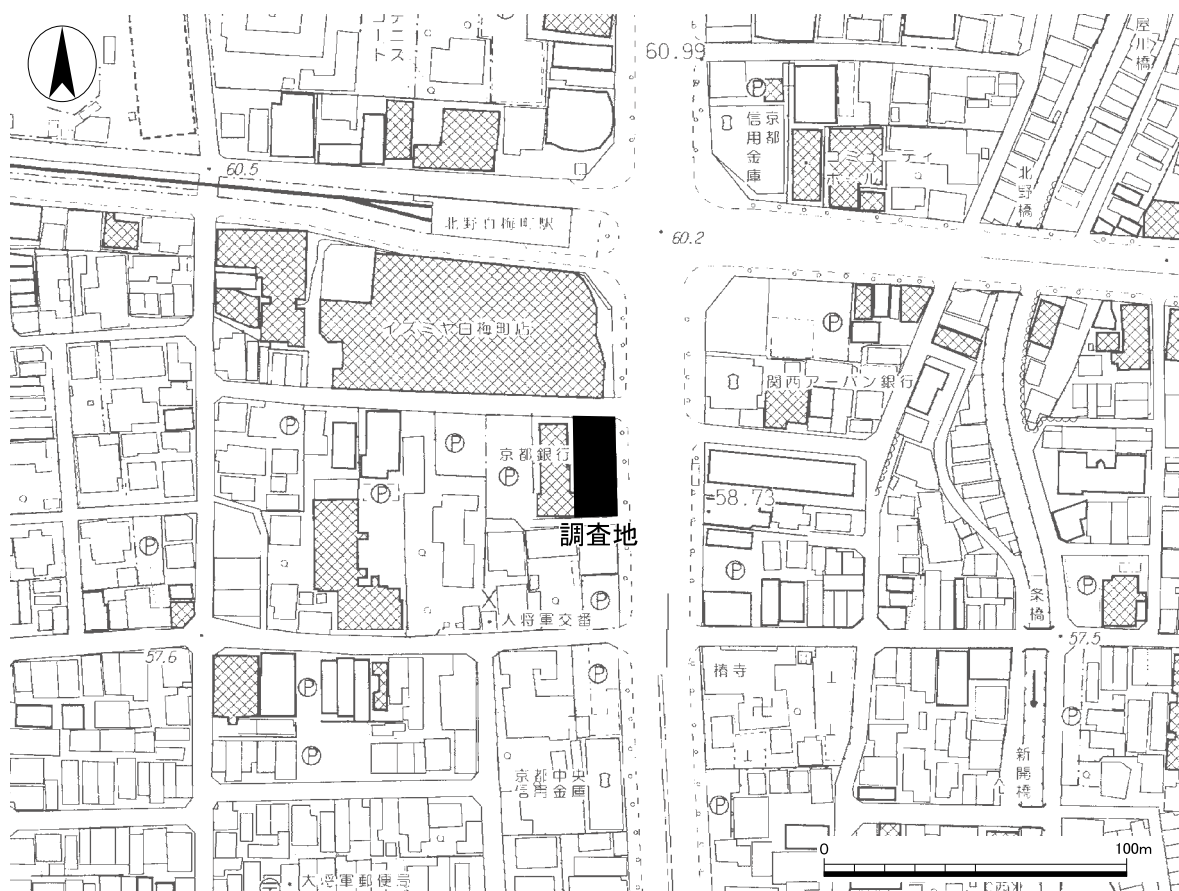


図1 調査位置図 (1 : 2,500)

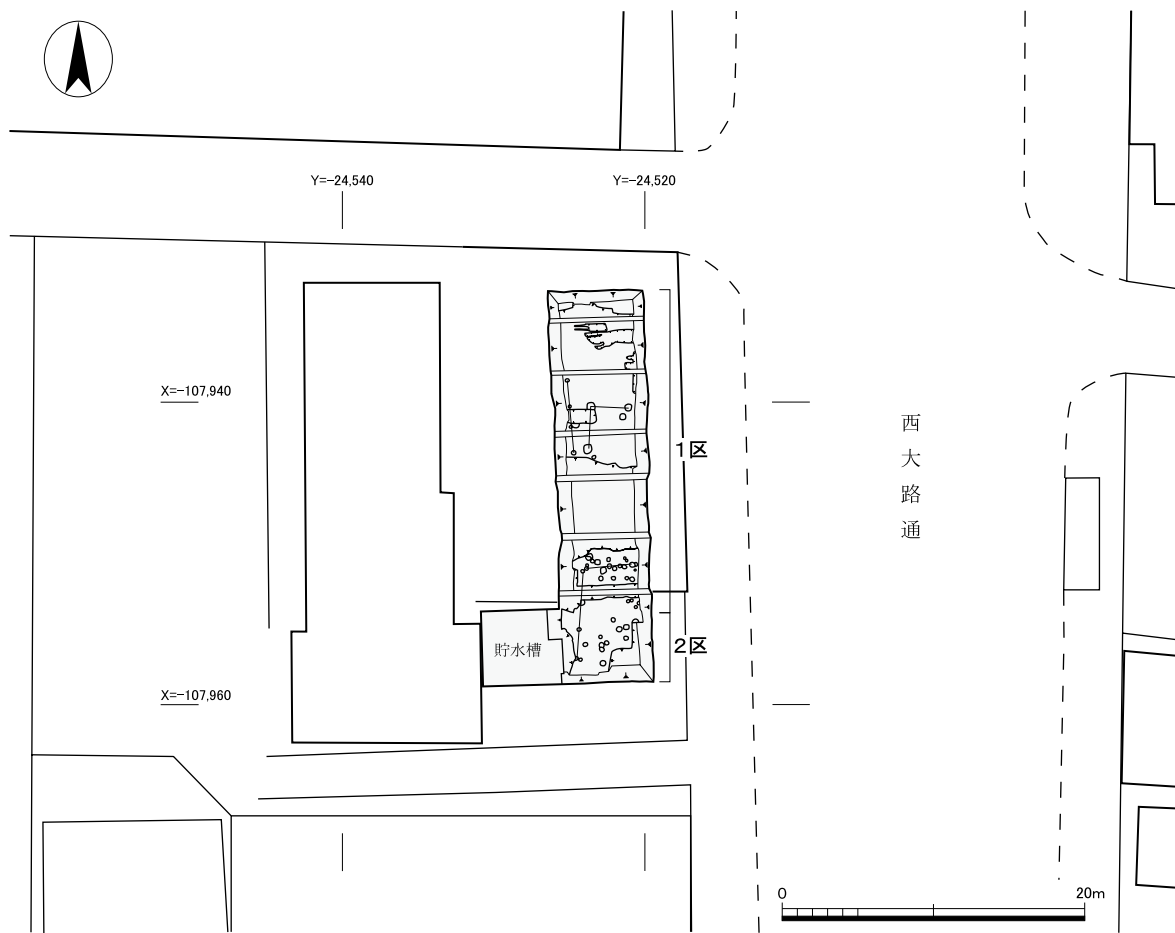


図2 調査区配置図 (1 : 500)



図3 調査前全景 (南から)



図4 調査風景 (南東から)

梅町支店の建物基礎により7つに分かれた。3月15日に南側の2区の重機掘削を行い、平成29年3月31日に調査を終了、撤収した。調査の段階ごとに、文化財保護課による臨検を受けた。

註

- 1) 『京都市遺跡地図台帳【第8版】』京都市文化市民局 2007年

2. 位置と環境

(1) 調査地の環境

調査地は京都盆地北西部に位置し、紙屋川（天神川）扇状地中央部の、南東に下る緩斜面上に立地する。一帯は律令制下の山城国葛野郡に比定され、渡来系氏族である秦氏の根拠地と考えられている。この地域における古墳時代後期から飛鳥時代の遺跡・遺構の増加は、当該勢力の伸張・開発に関連するものと想定されている¹⁾。北野廃寺や広隆寺など、葛野郡に所在する飛鳥時代以降の寺院跡も、秦氏が造営・経営に関わった氏族寺院であった可能性が高い²⁾。

平安時代、葛野郡一帯は禁野とされ、貴族の別業や寺が営まれた。調査地周辺にも野寺（常住寺）と称される寺院が所在したと推定されている³⁾。野寺（常住寺）は『日本後記』⁴⁾で七大寺とともに名を挙げられた寺院である。七堂伽藍を配し⁵⁾、西南別院も備えた⁶⁾。創建年代は不明であるが、天安2年（858）の西南別院の焼失、元慶8年（884）の七堂伽藍の焼失を経てもなお復興、再建を遂げ、応安7年（1374）まで文献史料によってその存在を追うことができる⁷⁾。

なお、調査地周辺における平安時代中期から室町時代の様子を伝える史料は、現在のところ、この野寺（常住寺）に関するものに限られる。周辺の発掘調査でも、当該時期の遺構・遺物の出土は希薄であり、活発な開発は想定しにくい。室町時代後期以後については、建物跡や溝などが多数検出されており、寺院廃絶後は一帯が集落域として機能した。特に寺域推定地北端で確認された、門遺構や溝を備える大規模な屋敷地は、北野社との関連が想定されている⁸⁾。

今回の調査地は、北野廃寺推定寺域内に位置している。北野廃寺は、昭和11年（1936）の区画整理工事で大規模な瓦包含層の発見に伴い周知された⁹⁾。出土遺物から飛鳥時代の建立と考えられている。これまでの調査によって、講堂跡と推定される瓦積基壇や、四至の北と東を画する築地状の遺構・溝、所用瓦を焼成した瓦窯などが確認された。北野廃寺の寺名や沿革については、『日本書記』¹⁰⁾に記載された葛野蜂岡寺をこれにあてる説や、広隆寺を蜂岡寺、北野廃寺を葛野秦寺とする説などがある。また、推定地内で出土した「野寺」「鶴室」「秦立」の墨書土器から、平安時代前期に興隆した野寺（常住寺）との関連が指摘されている¹¹⁾。

(2) 既往の調査（図5）

調査1では、古墳時代後期の竪穴住居、奈良時代の築地状遺構・溝、平安時代の土取り穴、室町時代の掘立柱建物などが検出されている。北野廃寺の寺域東限と想定される築地状遺構と溝を確認している¹²⁾。

調査2では、奈良時代の瓦積基壇・掘立柱建物、平安時代の土取り穴、室町時代の掘立柱建物などを検出した。奈良時代の瓦積基壇は北野廃寺の講堂跡と推定している¹³⁾。

調査3では、江戸時代の溝から縄文時代の尖頭器が出土している¹⁴⁾。

調査4では、古墳時代前期の竪穴住居、飛鳥・奈良時代の瓦窯・竪穴住居、平安時代の掘立柱建

物、中世以降の掘立柱建物・溝を検出した。瓦窯は東南方向に伸びる谷状地形を埋め、北東から南西への傾斜地を利用したもので、この場所で飛鳥時代から平安時代前期まで断続的に操業したと考えられている¹⁵⁾。

調査5では、飛鳥時代の竪穴住居跡、奈良・平安時代の溝・掘立柱建物、中世の柵などを検出した。ここでは北野廃寺の寺域北限と想定される東西溝を確認している¹⁶⁾。

調査6では、調査5から連なる谷状地形、平安時代の整地層、室町時代の柱列・溝・土坑を確認している。平安時代の整地層上面では焼土面を確認している¹⁷⁾。

調査7では、奈良・平安時代の溝・柱穴、室町時代の門遺構・堀・柱列を検出した。室町時代の遺構群は、比較的規模の大きい屋敷の存在を示すものと想定している¹⁸⁾。

調査8では、調査4・6から連なる谷状地形、平安時代の一条大路北側側溝、室町時代の溝などが検出されている。谷状地形は一条大路の北側側溝の成立までに埋められており、北側側溝も10世紀頃の整地により機能を喪失したと想定している¹⁹⁾。

調査9では、奈良時代の溝、平安時代の雨落溝を伴う建物、室町時代の溝・柵を検出した。室町時代の溝・柵は平野神社に関わる遺構群と想定している²⁰⁾。

調査10では、飛鳥時代の南北溝、平安時代の溝・掘立柱建物・土坑、中世の掘立柱建物などを検

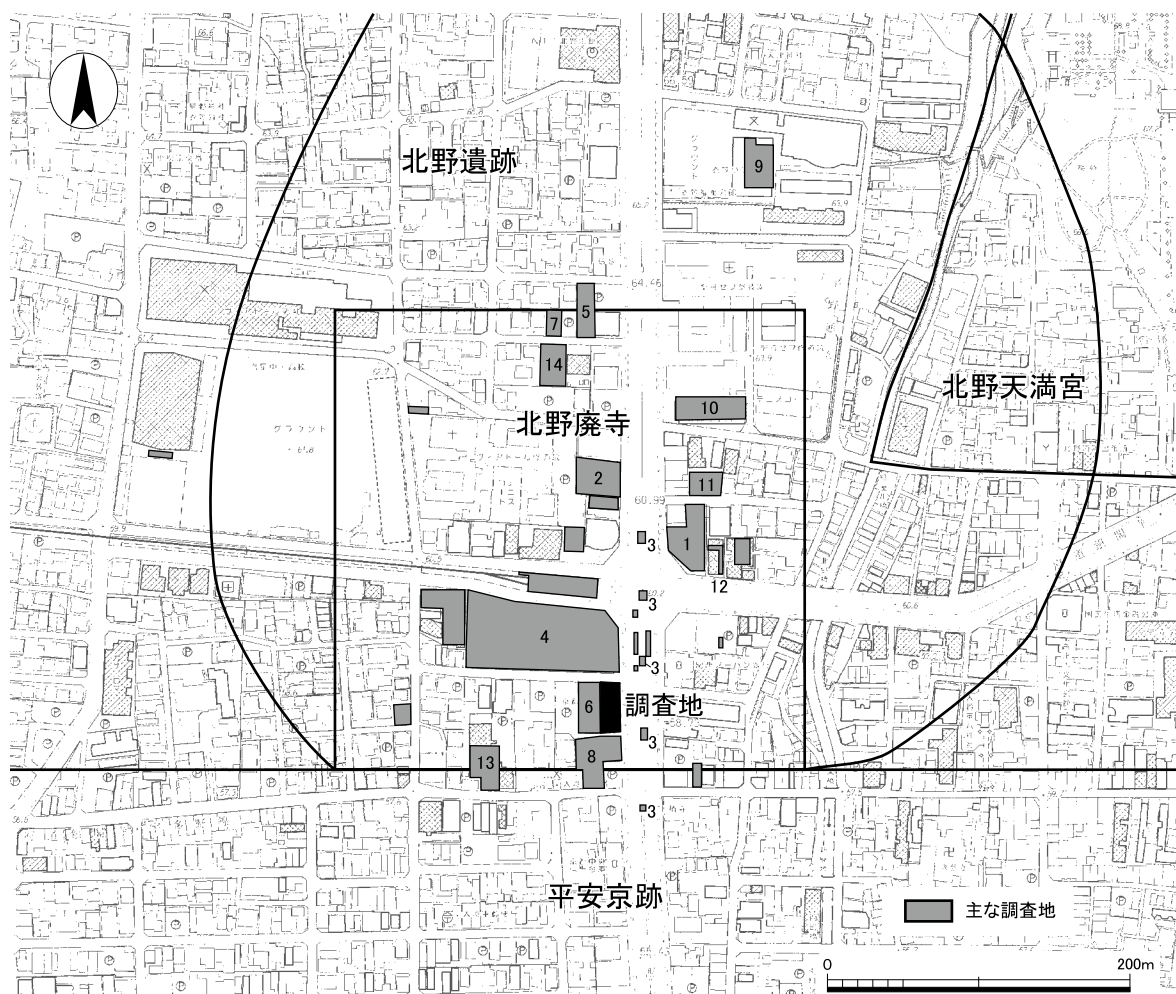


図5 周辺調査位置図 (1 : 5,000)

出した。飛鳥時代の南北溝は寺域東限と考えられている。調査区の南側では平安時代の不定形土坑群を確認した。「野寺」の墨書土器が出土している。²¹⁾

調査11では、飛鳥時代の南北溝、平安時代の掘立柱建物・土坑を検出した。平安時代の土坑は、径2.5m以上の不定形土坑を複数検出している。²²⁾

調査12では、築地の可能性がある壇状遺構、土取り穴と推定する土坑群を検出した。²³⁾

調査13では、平安時代の溝・井戸・土坑、室町時代の柱穴・土坑などを検出した。平安時代の溝は、一条大路の北側側溝と推定している。また井戸は3基検出されており、9世紀中頃から後半のSE80には、井戸枠の下部に石組が残存していた。土坑は土器を大量に包含する不定形土坑を確認しており、ここから出土した土師器の杯・皿類の大半にススの付着が認められた。²⁴⁾

調査14では、奈良時代から平安時代の掘立柱建物群を検出した。これら建物群のうち、9世紀前半の掘立柱建物には竈が伴うことを確認した。報告では、この掘立柱建物が食事調進などを行った施設であると推定している。また9世紀後半以降も倉のような掘立柱建物などが検出されており、野寺（常住寺）北辺には僧侶の日常生活に関わる付属雑舎が存在したと考えられている。²⁵⁾

参考文献

網 伸也「広隆寺創建問題に関する考古学的私見」『古代探叢Ⅳ - 滝口宏先生追悼考古学論集-』 滝口宏先生追悼考古学論集編集委員会・早稲田大学所沢校地埋蔵文化財調査室 1995年

網 伸也「平安京と東西寺・常住寺」『都城制研究（8）- 古代都城と寺社-』 奈良女子大学古代学学術研究センター 2014年

石田志朗「京都盆地北部の扇状地」『古代文化』34巻12号 財団法人古代学協会 1982年

鈴木久史「北野廢寺」『古代寺院と律令体制下の京都府～なぜそこに寺はあるのか～』第19回京都府埋蔵文化財研究会発表資料集 京都府埋蔵文化財研究会 2013年

関口 力・平田 泰「平安京の寺院」『平安京提要』 財団法人古代学協会・古代学研究所 1994年

堀 大輔「北野廢寺」『飛鳥白鳳の薨～京都市の古代寺院～』京都市文化財ブックス第24集 京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課 2010年

堀内明博『北野廢寺 発掘調査報告書』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第7冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1983年

龐谷 寿「北区概説 古代」『史料 京都の歴史 6 北区』 平凡社 1993年

註

- 1) 平田 泰「考察 2 太秦地域の遺跡」『京都嵯峨野の遺跡 - 広域立会調査による遺跡調査報告-』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1997年
- 2) 上村和直「広隆寺 - 移建か山背最古の寺-」『古代寺院の移建と再建を考える』 帝塚山考古学研究所 1995年
- 3) 福山敏男「野寺の位置について」『史迹と美術』第87号 史迹・美術同友会 1938年
- 4) 『日本後紀』巻5 延暦15年（796）11月辛丑の条
- 5) 『三代実録』巻45 元慶8年（884）3月丙子の条

- 6) 『文徳実録』巻10 天安2年(858)1月庚申の条
- 7) 井上満郎「付章2 北野廃寺に関連する文献史料」『北野廃寺 発掘調査報告書』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第7冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1983年
- 8) 柏田有香「Ⅷ 北野廃寺17次調査」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成22年度』京都市文化市民局 2011年
- 9) 藤沢一夫「山城北野廃寺」『考古学』第9巻第2号 東京考古学会 1938年
- 10) 『日本書紀』推古天皇三十一年七月の条
- 11) 註2に同じ
堀 大輔「北野廃寺」『飛鳥白鳳の薨～京都市の古代寺院～』京都市文化財ブックス第24集 京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課 2010年
- 12) 堀内明博『北野廃寺 発掘調査報告書』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第7冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1983年
- 13) 上村和直「42 北野廃寺」『昭和52年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年
- 14) 網 伸也「69 北野廃寺2」『昭和53年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年
- 15) 上村和直「71 北野廃寺2」『昭和54年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2012年
- 16) 鈴木久男「Ⅰ 第10次発掘調査」『北野廃寺発掘調査概報 昭和61年度』京都市文化観光局 1986年
- 17) 本 弥八郎・木下保明「Ⅱ 第11次発掘調査」『北野廃寺発掘調査概報 昭和61年度』京都市文化観光局 1986年
- 18) 註8に同じ
- 19) 吉川義彦『北野廃寺発掘調査報告』関西文化財調査会 2010年
- 20) 平田 泰「18 北野遺跡」『平成6年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 21) 上村和直「70 北野廃寺1」『昭和54年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2012年
- 22) 堀内明博・前田義明「48 北野廃寺」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1984年
- 23) 久世康博「45 北野廃寺」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1993年
- 24) 平尾政幸「11 平安京右京北辺二坊・北野廃寺」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1999年
- 25) 網 伸也・南 孝雄「Ⅱ 北野廃寺第15次調査」『京都市内遺跡発掘調査概報 平成8年度』京都市文化市民局 1997年

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図7)

調査区の基本的な層序は、現地表から現代盛土、粘質の黒褐色微砂層 (1層)、平安時代の整地層である土師器片を大量に含む暗褐色細砂層 (3層)、土坑群埋土 (4~21層) の順に堆積しており、以下は地山の黄褐色シルト層 (22層)、径0.5~0.1mの礫を含む黄褐色微砂層 (23層) と続く。

調査は1層上面を第1面、3層上面を第2面、3層除去後の土坑群検出面を第3面として調査を行った。1区は後世の削平により1層と3層の一部が削平されている。1層を確認したのは2区のみである。第1面で中世、第2面と第3面で平安時代の遺構を検出した。

(2) 遺構の概要 (表1)

中世と平安時代の遺構を検出した。平安時代の遺構が主体を占める。検出した遺構は、中世の溝・柱穴、平安時代の柱穴・井戸・土坑がある。中世の遺構は、時期を示す遺物は出土していないが、層序から中世と推定した。平安時代の土坑は不整形な平面形を呈し、形状などから土取り穴の可能性が考えられる。

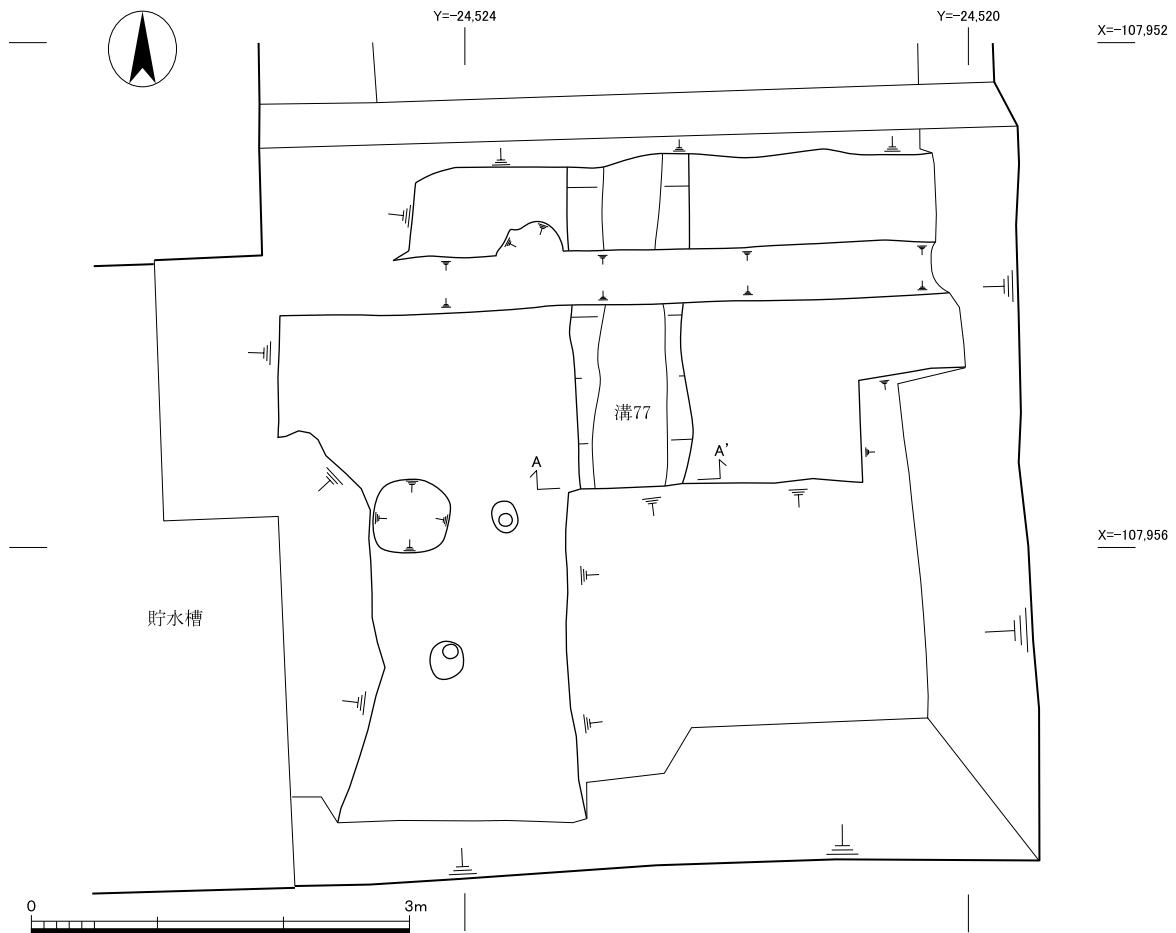


図6 第1面平面図 (1:60)

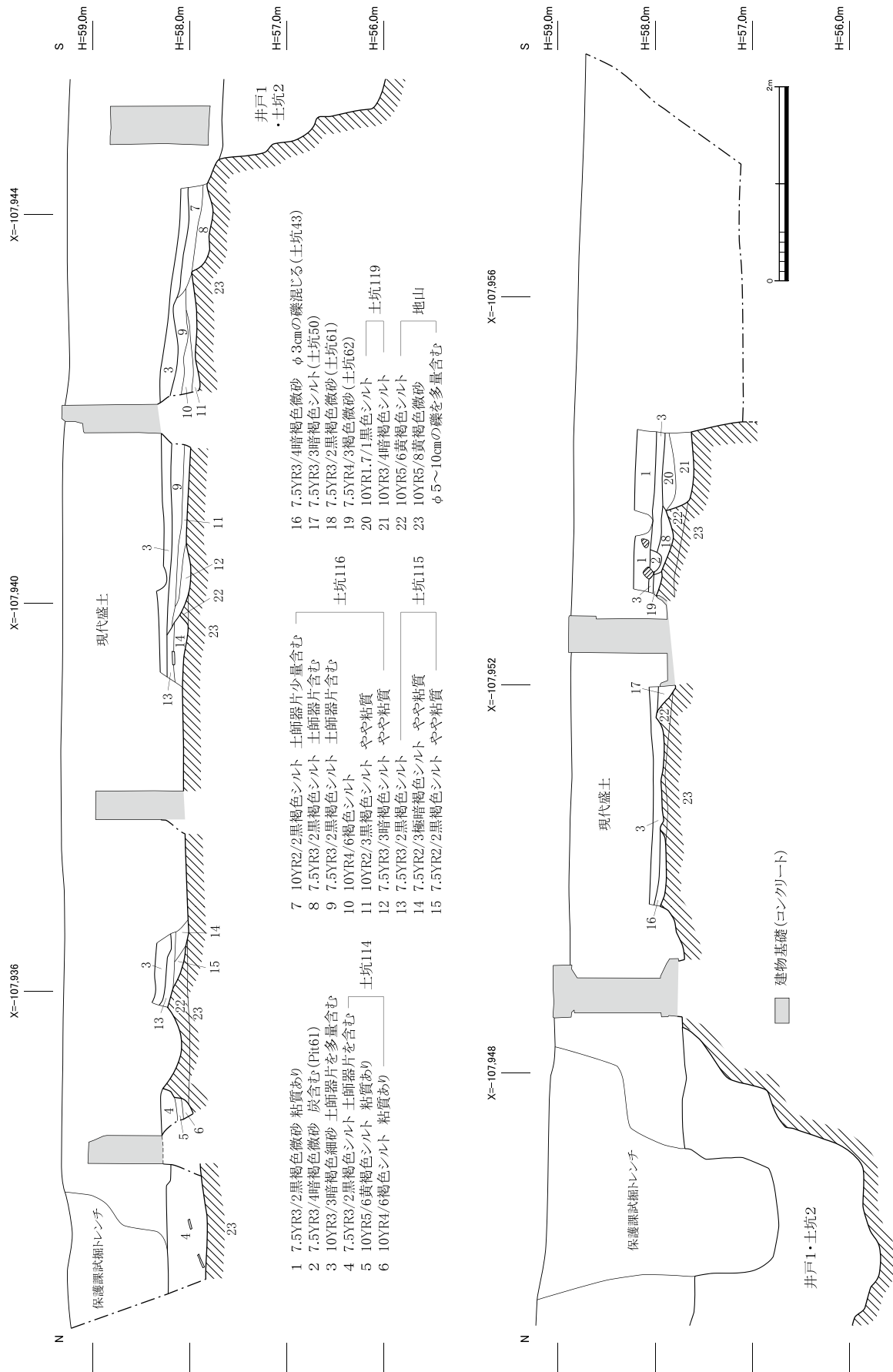


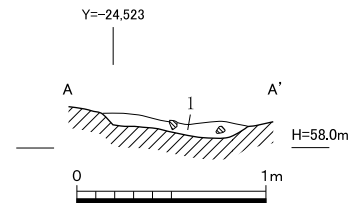
図7 調査区東壁断面図 (1 : 60)

表1 遺構概要表

時代	遺構	備考
平安時代	土坑2・114～116・118・119、井戸1、建物110、柵111～113	
中世	溝77	

(3) 第1面の遺構 (図6)

溝77 (図8) 2区で検出した南北溝である。幅0.8～1.0m、深さ0.1～0.2mを測る。埋土に石や瓦片を含むが、図化できる遺物は出土しなかった。



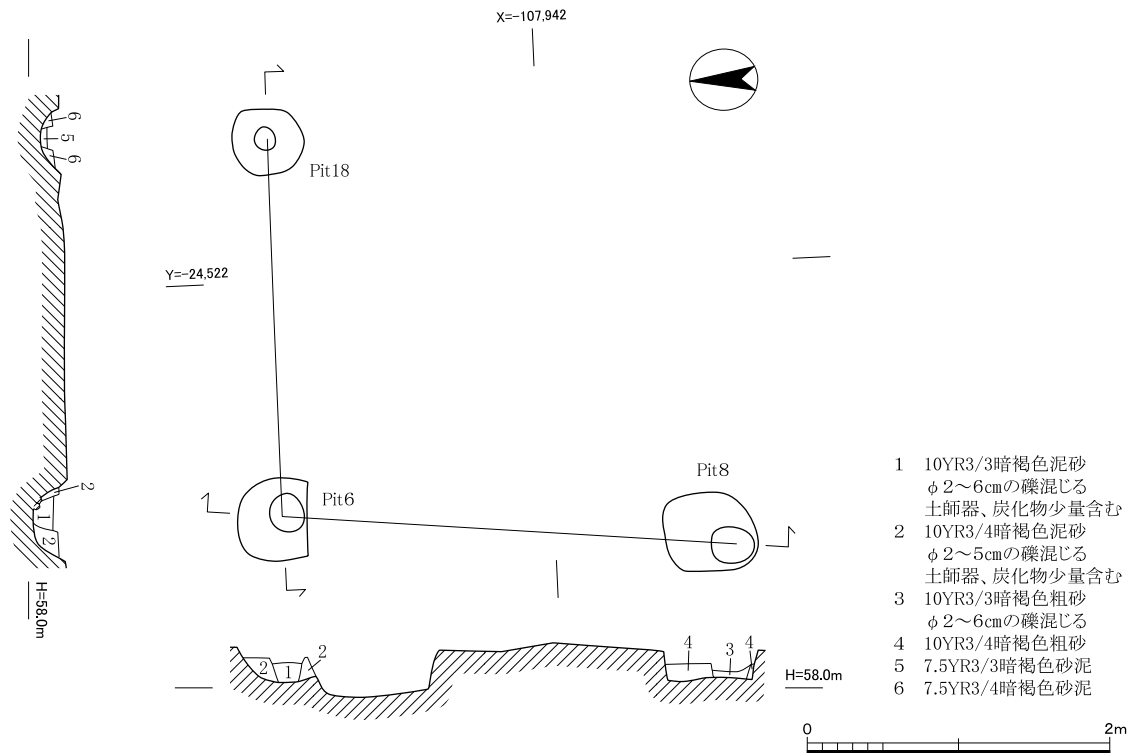
1 10YR3/3 暗褐色砂泥 φ5cmの礫・瓦
10YR5/6 黄褐色シルトブロック 含む
※ 断面の位置は図6参照

図8 溝77断面図 (1:40)

(4) 第2面の遺構 (図10、図版1-1)

建物110 (図9、図版2-2) 1区で検出した掘立柱建物である。方位は北に対して東に約2°振れる。柱間は2.6～2.9mである。掘形は不整形な方形を呈し、直径0.45～0.6m、深さ0.15～0.25mを測る。

柵111 (図11) 1区で検出した3基の柱穴 (Pit33・15・44) からなる東西方向の柵である。方位は東に対して北に約5°振れる。柱間は等間で約1.6mである。掘形は不整形な円形を呈し、直径0.25～0.35m、深さ0.1～0.15mを測る。



1 10YR3/3暗褐色泥砂
φ2～6cmの礫混じる
土師器、炭化物少量含む
2 10YR3/4暗褐色泥砂
φ2～5cmの礫混じる
土師器、炭化物少量含む
3 10YR3/3暗褐色粗砂
φ2～6cmの礫混じる
4 10YR3/4暗褐色泥砂
5 7.5YR3/3暗褐色砂泥
6 7.5YR3/4暗褐色砂泥

図9 建物110実測図 (1:50)

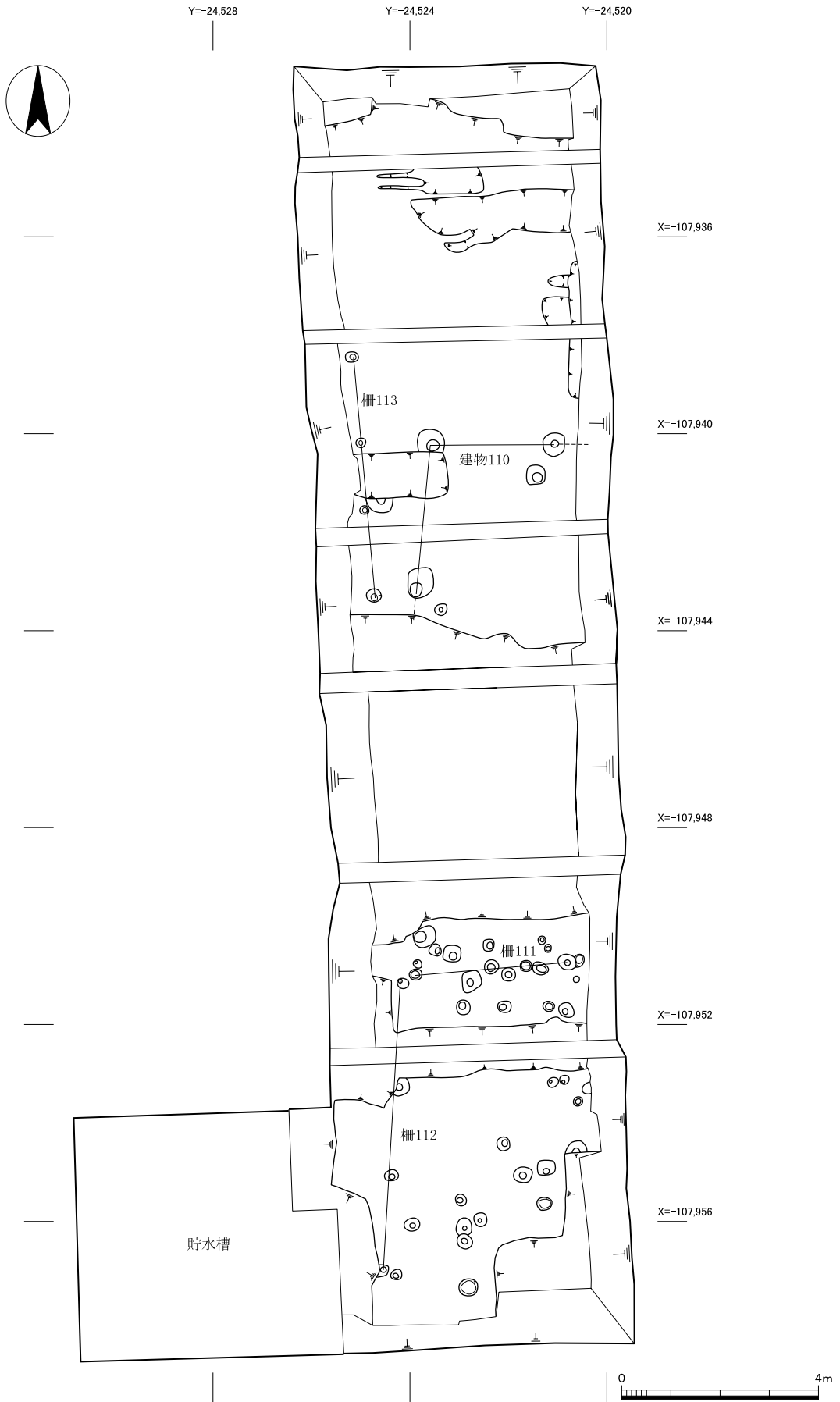
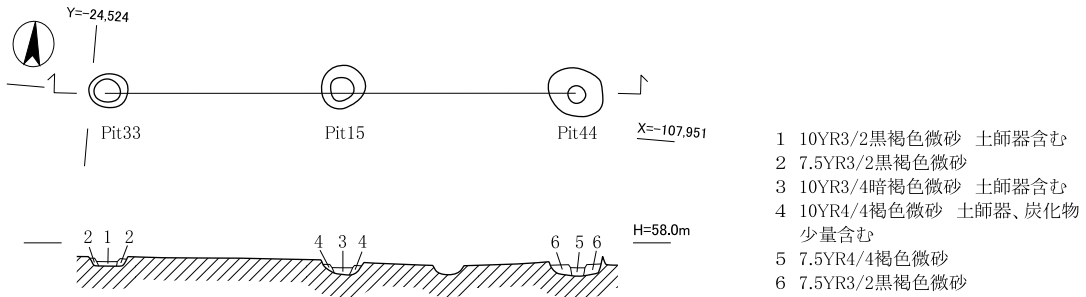


图10 第2面平面图 (1 : 120)

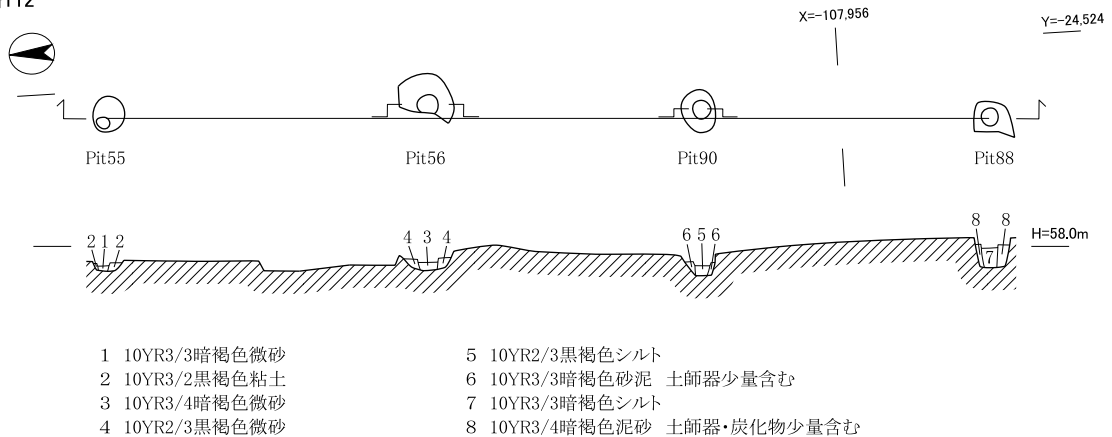
柵112 (図11) 1・2区で検出した4基の柱穴 (Pit55・56・90・88) からなる南北方向の柵である。主軸方向は北に対して東に約1°振れる。柱間は等間で1.9mである。掘形はいずれも不整形な円形で、直径0.2~0.4m、深さ0.1~0.2mを測る。

柵113 (図11、図版2-2) 1区で検出した4基の柱穴 (Pit19・20・21・9) からなる南北方向の柵である。主軸方向は北に対して西に約5°振れる。柱間は不等間で1.4~1.8mである。掘形はいずれも円形で、直径0.15~0.25m、深さ0.15~0.2mを測る。

柵111



柵112



柵113

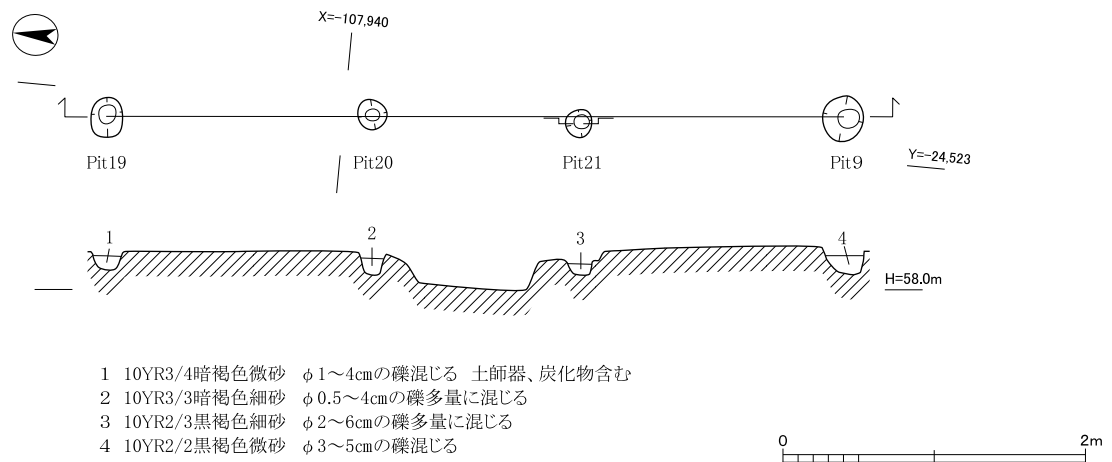


図11 柵111~113実測図 (1:50)

(5) 第3面の遺構 (図12、図版1 - 2)

井戸1 (図13、図版2 - 1) 1区で検出した井戸である。上面は現代の造成や建造物の基礎工事によって削平され、東辺は現代の井戸で攪乱されている。掘形は南北3.0m、東西2.6m、深さ1.9mを測る。方形の井戸枠の内側に円形の井戸枠を組み込む構造をもつ。

外側の井戸枠は平面方形を呈し、一辺約1.6mを測る。四隅には隅柱の痕跡が残る。隅柱は径0.2m、深さ0.5mを測る。内側の井戸枠は平面円形を呈し、径1.0m、深さ1.0mを測る。掘形埋土には人頭大の礫を多く含み、礫群の間には空隙も認められた。

土坑2 (図13) 南北4.0m、東西3.0m、深さ0.9mを測る。2段掘形を有する。井戸1による攪乱を受けている。井戸1に先行する井戸掘形の可能性がある。

土坑118 1区南端から2区で検出した土坑である。土坑の西側は調査区外に続く。規模は東西4.0m、南北5.9m以上である。深さ0.2～0.5mを測る。複数の土坑が集積して形成されており、北東側は弧状に一段深く掘り込まれている。礫を多量に含む黄褐色微砂層の直上まで掘削する。

土坑119 2区で検出した土坑である。土坑の南側・東側は調査区外に続く。規模は東西4.6m、南北4.2m以上である。深さ0.2～0.3mを測る。複数の土坑が集積して形成されており、北西側は弧状に一段深く掘り込まれている。礫を多量に含む黄褐色微砂層の直上まで掘削する。

土坑114 1区北東隅で検出した土坑である。土坑の北側・東側は調査区外に続く。規模は東西3.5m、南北2.8m以上である。深さ0.3～0.4mを測る。複数の土坑が集積して形成されており、南西側は弧状に掘り込まれている。礫を多量に含む黄褐色微砂層の直上まで掘削する。

土坑115 土坑114の南側で検出した土坑である。土坑の東側は調査区外に続く。規模は東西1.6m、南北4.0m以上である。深さ0.3mを測る。礫を多量に含む黄褐色微砂層の直上まで掘削する。

土坑116 井戸1の北側で検出した土坑である。土坑の東側は調査区外に続く。規模は東西1.9m、南北4.4m以上である。深さ0.3～0.4mを測る。複数の土坑が集積して形成されている。礫を多量に含む黄褐色微砂層の直上まで掘削する。

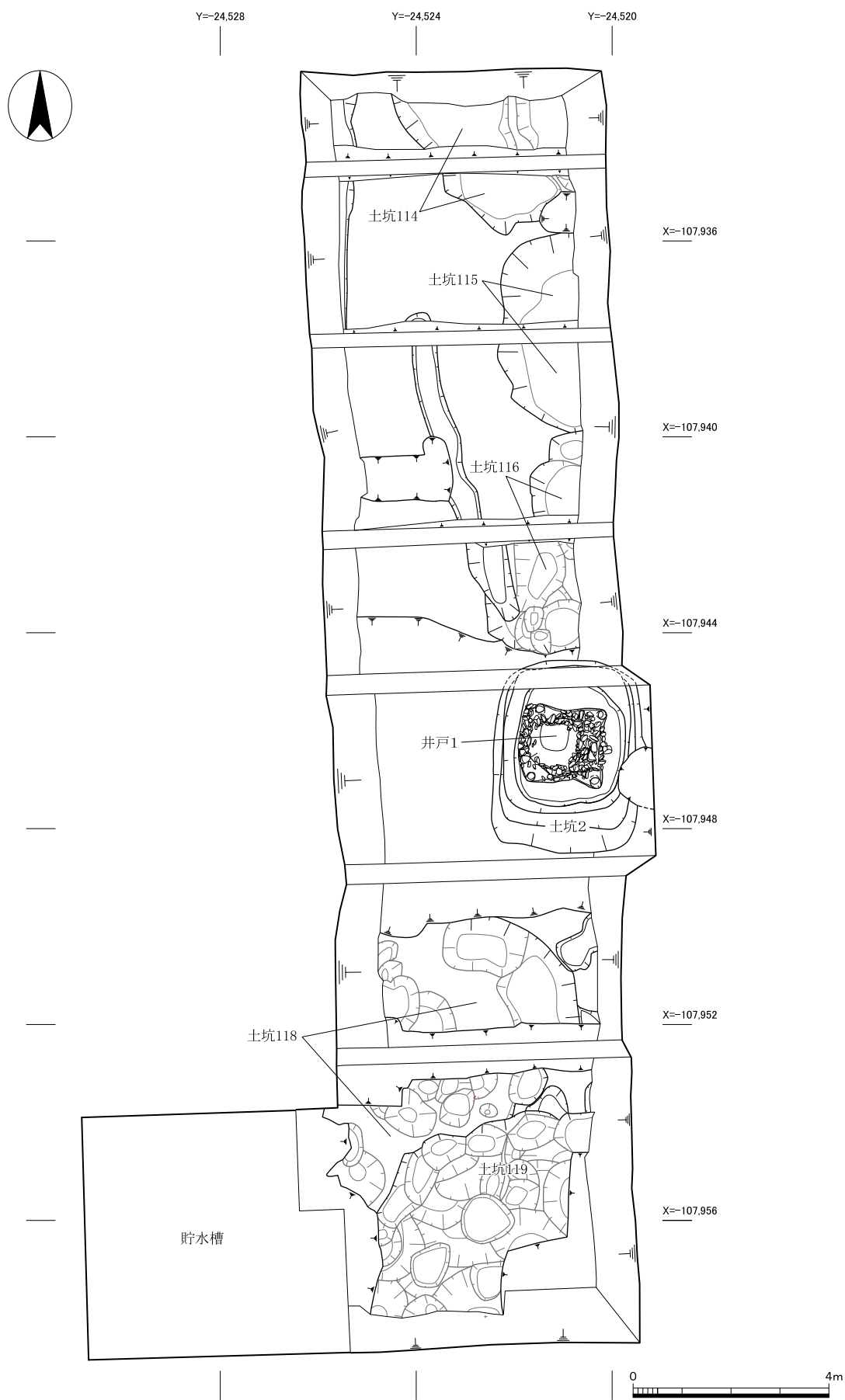


图12 第3面平面图 (1 : 120)

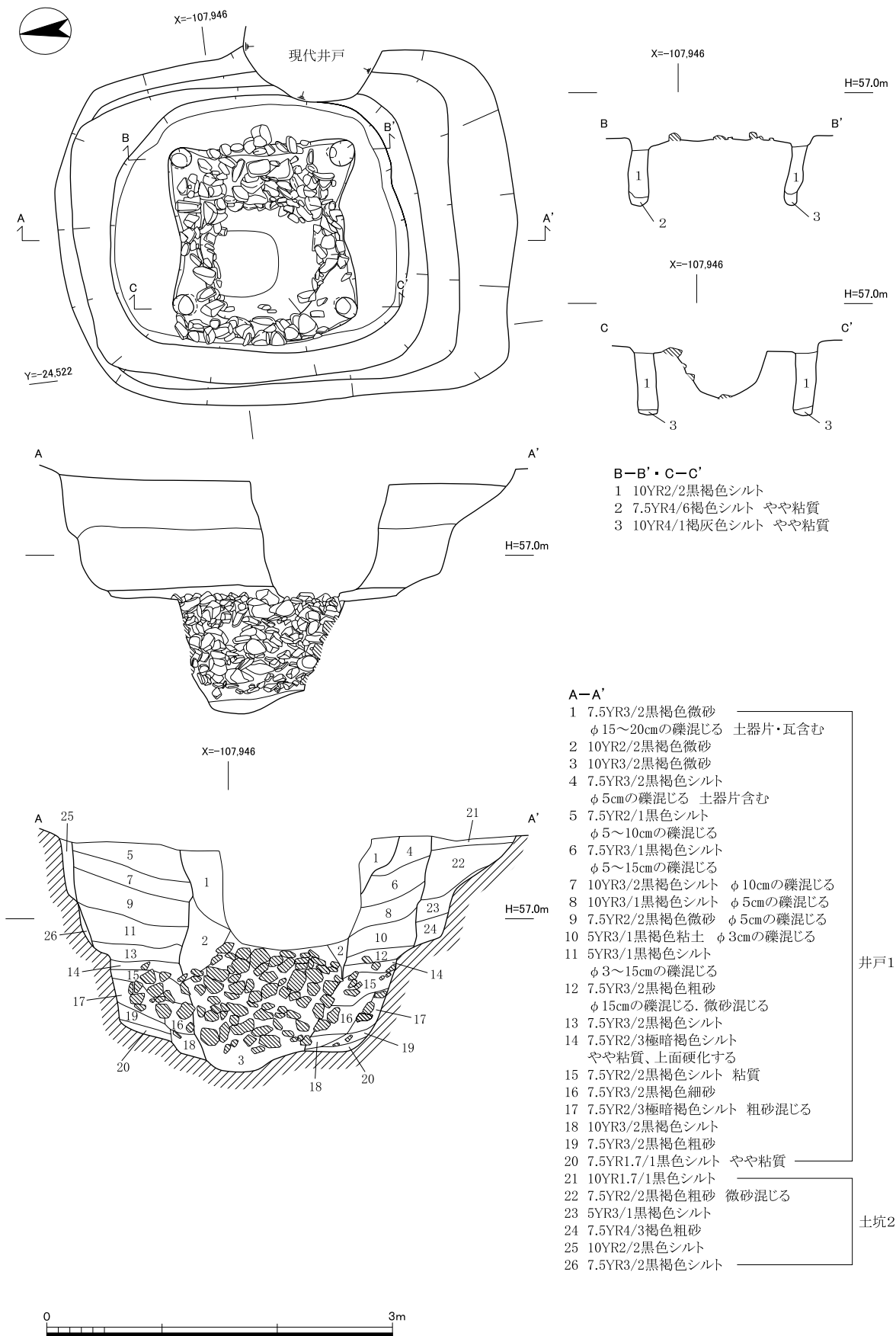


図13 井戸1・土坑2実測図 (1:50)

4. 遺物

(1) 遺物の概要 (表2)

飛鳥時代から奈良時代の瓦類、平安時代前期から中期の土器類・鉄釘、江戸時代の瓦類・銭貨が出土した。

飛鳥時代から奈良時代の瓦類は、第3面の井戸や土坑群、整地層(3層)など、平安時代の遺構から出土した。混入と考えられる。平瓦が主体を占め、軒瓦・丸瓦は少ない。

平安時代前期から中期の土器類・鉄釘は、第3面の井戸や土坑群、平安時代整地層(3層)から出土した。

江戸時代の瓦類・銭貨は、現代盛土層と攪乱から出土した。

(2) 土器類 (図14～16、図版3、付表1)

井戸1出土土器(図14) 土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器が出土した。13・14は井戸枠内の上層(図13:1層)、1～12は井戸枠内下層(図13:3層)出土の土器である。土師器の椀杯類は京都Ⅱ期中段階新相¹⁾の特徴をもつ。

井戸枠内下層出土の土器類には土師器、須恵器がある。土師器は椀A(1・2)、杯A(3・4)、杯B(5～8)、甕(9)がある。椀杯類はe手法が主体である。椀Aは口径13.6～13.9cm・器高2.5～2.6cmを測る。杯Aは口径15.2～15.8cm・器高3.2～3.3cm。杯Bは口径15.9cm・器高3.5cmの小型のものと、口径17.0～18.0cm・器高3.5～4.0cmの大型のものがある。8は外面下部に粗いヘラケズリ調整を施す。甕は口縁部にヨコナデ調整を施し、胴部外面にタタキ痕を残す。外面にスス、内底面にコゲが付着している。須恵器は瓶子(10～12)がある。いずれも底部に糸切り痕を残す。10の外面には、縦方向の2条の沈線が認められる。

井戸枠内上層出土の土器類には灰釉陶器、緑釉陶器がある。13は灰釉陶器の皿である。内外面に

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
飛鳥時代 ～奈良時代	瓦類		軒平瓦3点、平瓦7点		
平安時代	土師器、須恵器、黒色土器、 灰釉陶器、緑釉陶器、二彩、 鉄釘、銭貨		土師器14点、須恵器9点、黒色 土器1点、灰釉陶器1点、緑釉 陶器4点、二彩1点、金属製品 1点、銭貨1点		
江戸時代	瓦類、銭貨		軒平瓦1点、銭貨1点		
合計		21箱	44点(5箱)	1箱	15箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より6箱多くなっている。

井戸1

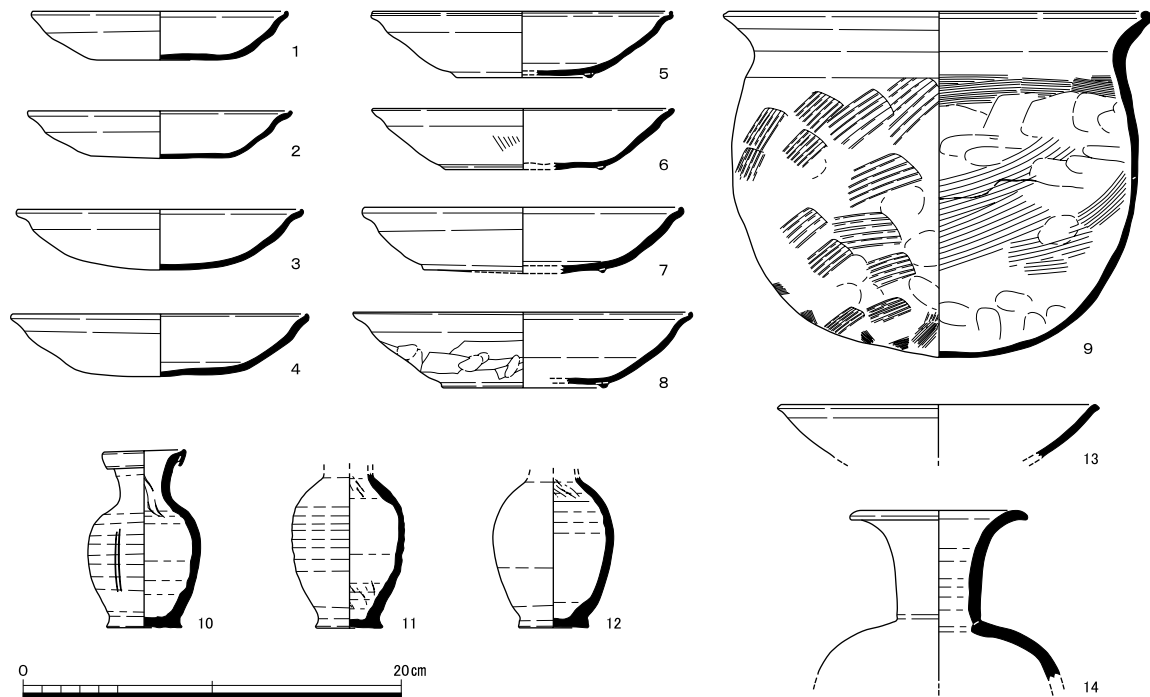
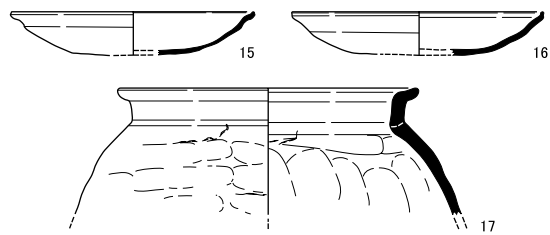
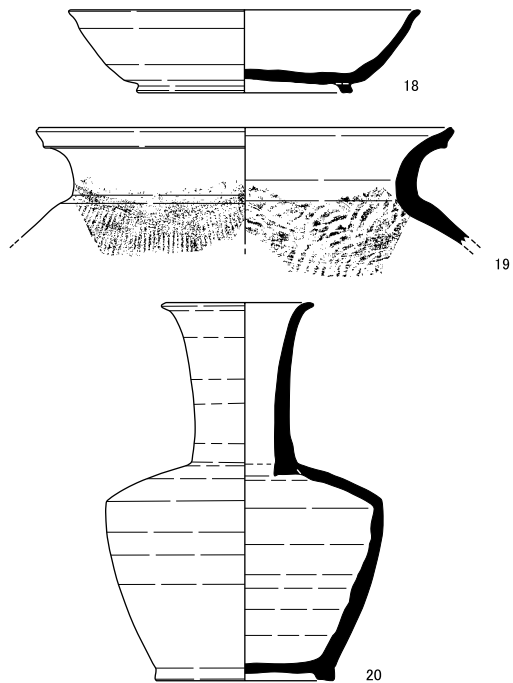


图14 井戸1出土土器实测图(1:4)

土坑114



土坑118



土坑119

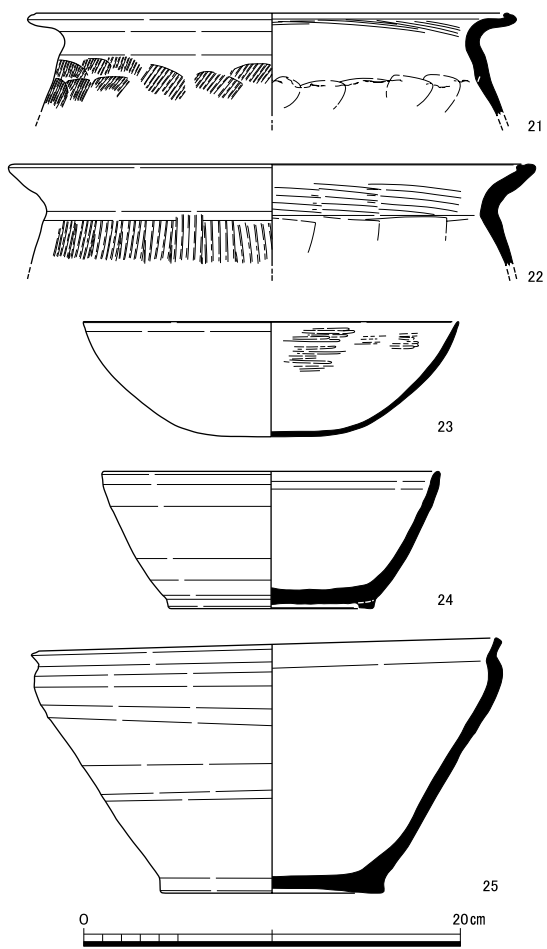


图15 土坑114·118·119出土土器实测图(1:4)

灰釉をハケ塗りしている。14は緑釉陶器の長頸壺である。東海産。土坑118出土の緑釉陶器片と接合した。

土坑114出土土器 (図15、表3) 土師器の椀もしくは杯A (15・16)、甕 (17) がある。椀もしくは杯Aは口径13.0~13.3cm・器高2.3cmを測る。出土破片数は多いが、法量を計測できるものは少ない。多くに油煙が付着する。京都Ⅱ期新段階からⅢ期古段階の特徴を

もつ。甕は短い口縁部が付くもので、胴部内外面にユビオサエ痕と粘土紐の接合根を残す。外面にススが付着している。河内産。

土坑116出土土器 (表3) 土師器の椀もしくは杯Aがある。出土破片数は多いが、法量を計測できるものはない。多くに油煙が付着する。京都Ⅱ期新段階からⅢ期古段階の特徴をもつ。

土坑118出土土器 (図15、表3) 土師器、須恵器が出土した。土師器は椀杯類が出土したが、図化できるものはない。京都Ⅱ期の特徴をもつ。須恵器は杯B (18)、甕 (19)、長頸壺 (20) がある。長頸壺は肩が張り稜角を呈する体部をもつ。

土坑119出土土器 (図15、表3) 土師器、黒色土器、須恵器が出土した。土師器は甕 (21・22) がある。22は胴部外面にハケメを残す。23は黒色土器のA類杯である。内面にミガキ調整を施すが、外面は摩耗のため調整は不明。須恵器は杯B (24)、鉢 (25) がある。鉢は口縁部が屈曲するもので、底部に糸切り痕を残す。

3層出土土器 (図16) 土師器、須恵器、緑釉陶器などが出土した。土師器は杯類が大量に出土したが、図化できるものはない。26は須恵器の円面硯である。透し穴が1方向のみ残存する。硯面は使用により平滑で、墨痕が残存する。緑釉陶器は椀 (27)、蓋 (28・29) がある。椀は削り出し高台をもつ。全面に施釉する。京都産。28は香炉の蓋である。陰刻花文と透し孔をもつ。東海産。29は高台状のつまみをもつ蓋である。外面に精緻な陰刻花文を施す。東海産。愛知県名古屋市所在の熊ノ前古窯跡群第4地区 (NN285号窯・NN-85号窯) に類例²⁾。

1層出土土器 (図16) 30は二彩の香炉蓋のつまみである。相輪形を呈する。

表3 土師器椀・杯・皿類の油煙付着状況

	総破片数	油煙付着破片数
土坑114	715	270 (37.8%)
土坑116	652	292 (44.9%)
土坑118	161	21 (13.0%)
土坑119	108	21 (19.4%)

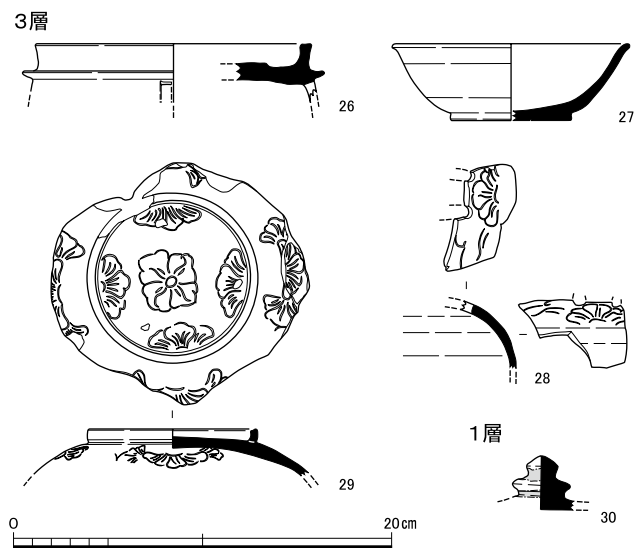


図16 3層・1層出土土器実測図 (1:4)

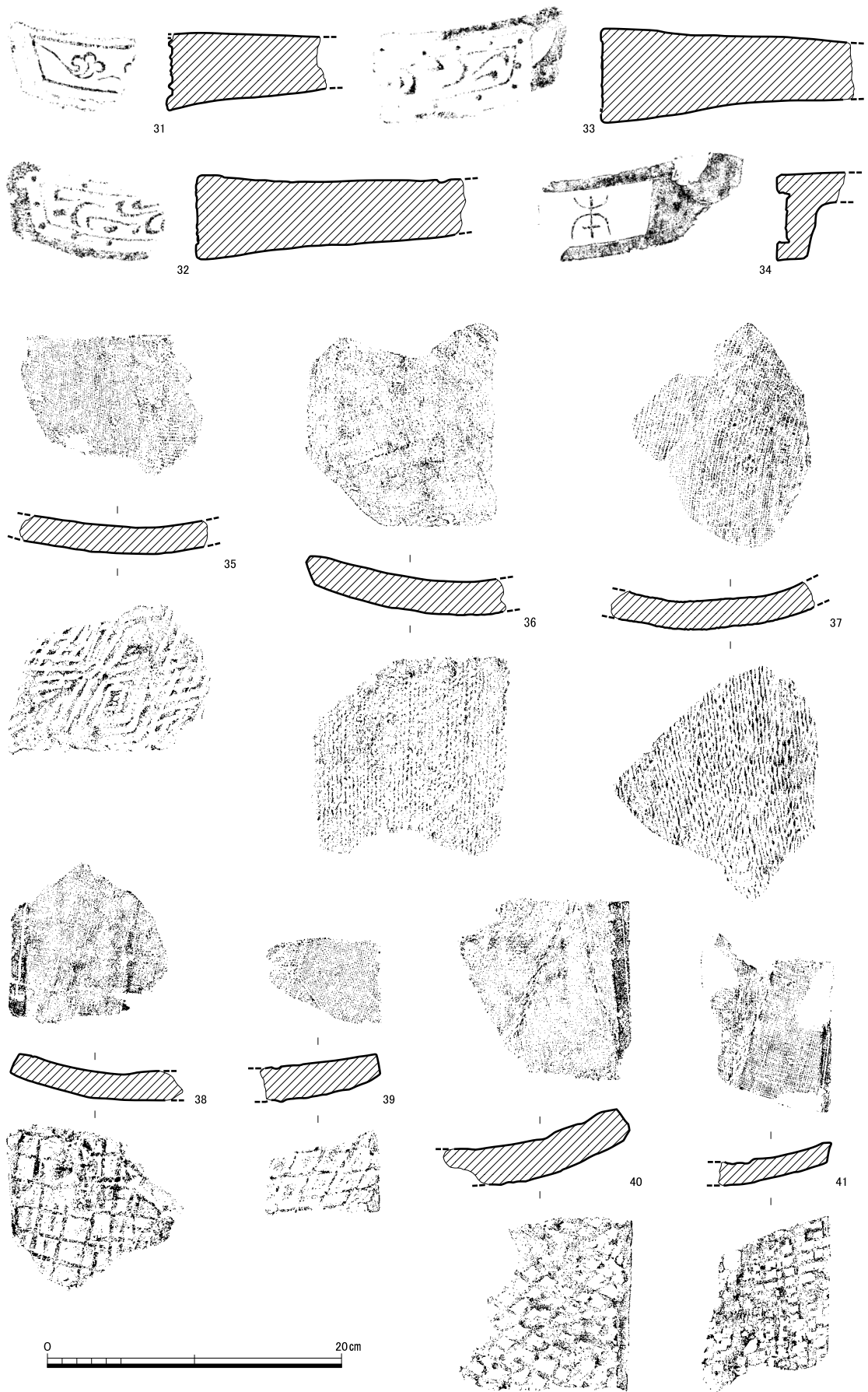


图17 出土瓦拓影及び実測図（1：4）

(3) 瓦 類 (図17、付表2)

軒平瓦

31は飛雲文軒平瓦である。直線顎。凸面に赤色顔料が付着する。奈良時代末。土坑114から出土した。平城宮6802型式。平安京周辺では右京七条一坊や東寺で同文瓦が出土している³⁾。

32・33は唐草文軒平瓦である。外区に珠文が巡る。直線顎。焼成不良で磨滅が著しい。33は瓦当面の支葉を一部欠く。奈良時代末から平安時代初頭。32は井戸1、33は土坑2から出土した。長岡京7722F型式。北野廃寺瓦窯7号窯で生産された「旨」銘軒瓦と同文。広隆寺仮金堂の北側でも同文瓦が採集されている⁴⁾。

34は瓦当面に「本」を配する軒平瓦である。段顎。江戸時代。1区攪乱から出土した。

平瓦

35～41は平瓦である。35は凸面に雷文のような幾何学文のタタキ痕をもつ。36・37は凸面に縄目タタキを施す。38～41は凸面に格子目状のタタキ痕をもつ。35・36・40は土坑114、37・39・41は3層、38は井戸1掘形埋土から出土した。飛鳥時代から奈良時代。

(4) 金属製品 (図18、付表3)

釘

42は鉄製の折釘もしくは叩折釘である。釘頭は断面L字状を呈し、胴部断面は方形である。先端部は欠損している。土坑119から出土した。

銭貨

43は皇宋通寶である。篆書体。1区現代盛土から出土。

44は文久永宝である。草書体。略宝。鑄不足により穿から「永」の字画にかけて一部欠損する。1区攪乱から出土した。

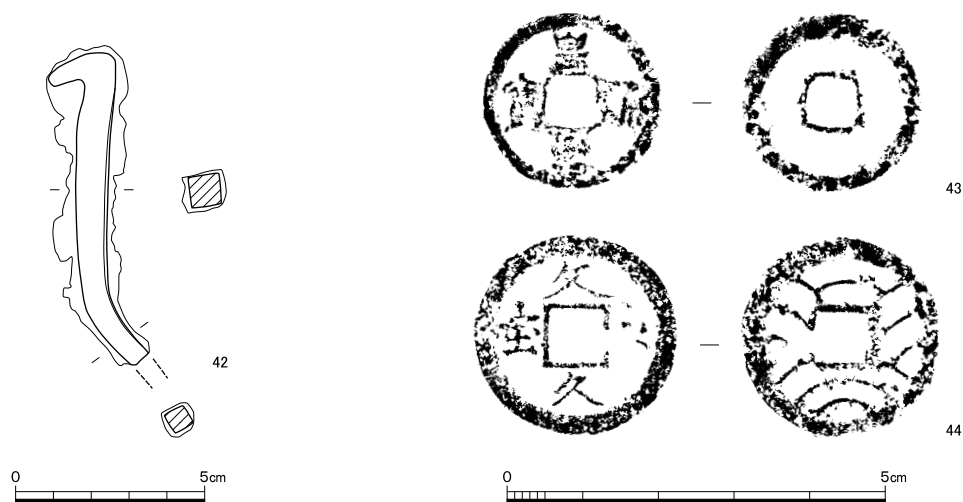


図18 出土金属製品実測図(1:2)、銭貨拓影(1:1)

参考文献

- 上村憲章「須恵器」『平安京提要』財団法人古代学協会・古代学研究所 1994年
 金田善敬「鉄釘の技術」『モノと技術の古代史』金属編 吉川弘文館 2017年。
 佐藤 隆「飛雲文系軒瓦について」『長岡京古文化論叢Ⅱ』中山修一先生喜寿記念事業会 1992年
 中島信親「光仁・桓武朝の瓦生産について 長岡宮式軒瓦を中心として」『国立歴史民俗博物館研究報告』
 第134集 国立歴史民俗博物館 2007年
 平尾政幸「緑釉陶器・灰釉陶器・白色土器」『平安京提要』財団法人古代学協会・古代学研究所 1994年

註

- 1) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年

750頃		840頃		930頃		1010頃		1080~90頃		1180頃		1270頃		1360頃		1440頃		1500頃		1580~90頃		1660頃		1740年代頃		1820年代頃			
I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	XI	XII	XIII	XIV																
古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新

- 2) 尾野善裕「熊ノ前古窯跡群第4地区」『古代の土器研究 - 平安時代の緑釉陶器・生産地の様相を中心に -』古代の土器研究会第7回シンポジウム 古代の土器研究会 2003年
 3) 鈴木久男「平安京右京七条一坊の軒瓦について」『長岡京古瓦聚成』向日市埋蔵文化財調査報告書第20集 向日市教育委員会 1987年 図版編第66図
 『木村捷三郎収集瓦図録』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年 図版28 - 346
 4) 梅原末治「廣隆寺礎石及古瓦」『京都府史蹟勝地調査會報告』第1冊 京都府 1919年 図版10 - 11
 畑 美樹徳・山口 博『北野廢寺跡 発掘調査報告』六勝寺研究会 1978年 第7図右下
 鈴木久男「北野廢寺瓦窯について」『歴史考古学を考える1 - 古代瓦の生産と流通 -』帝塚山考古学研究所 1987年 図5 - 11
 『木村捷三郎収集瓦図録』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年 図版46 - 745・746
 上村和直「71 北野廢寺2」『昭和54年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2012年 図325 - 34

5. ま と め

今回の調査では、平安時代から中世の遺構を検出した。遺構の時期は、層位と出土遺物から4期に分けることができる。

1期（9世紀後葉） 1区で井戸1を検出した。井戸は掘形が3mを超える大型のものであり、方形の井戸枠の内側に円形の井戸枠を組み込む構造であった。また、円形井戸枠の掘形埋土には礫が多数混入していた。さらに、円形井戸枠の内底部が、隅柱の深さから推定できる方形井戸枠の底部よりも深いことから、上下2段構造であった可能性も指摘できる。上下2段構造の井戸の事例¹⁾は、平安京右京三条三坊三町跡井戸²⁾340、飛鳥池遺跡SE42³⁾、平城京右京八条一坊十四坪SE1700⁴⁾などがある。

ところで、北野廃寺の調査13では、9世紀中葉（SE80）・10世紀前葉（SE100）・11世紀前葉（SE105）の井戸を検出している⁵⁾。今回の調査例を含め、寺域南部に複数の井戸が分布することを指摘できる。井戸を必要とする施設が、寺域南部に存在していたことを示すものと考えられる。なお、今回の調査では飛鳥時代から奈良時代の瓦類が出土しているが、これに伴う遺構は確認できなかった。

2期（9世紀末から10世紀前半） 調査区全域で土坑群を検出した。土坑は平面不整形を呈し、地山の黄褐色シルト層が堆積していたとみられる範囲に分布する。黄褐色シルト層下層の、礫を多量に含む黄褐色微砂層の直上まで掘削していることから、シルト質の土を採取した土取り穴の可能性が考えられる。調査区南側の土坑118・119からは、相対的に古相の土器が出土した。

土取り穴と考えられる不定形土坑は、今回調査区の他にも、調査1・2・10・11・12などで検出している。9世紀末から10世紀前半にかけて、寺域推定地内の各所で土取りが行われた可能性が高い。この黄褐色シルト層は、盛土や瓦の下地などの建築資材として利用可能なものであることから、こうした土取り穴の存在は、寺内で大規模な造営が行われたことを傍証するものと考えられる。文献資料によると、元慶8年（884）に七堂伽藍焼失の記事が残されており、この復興事業に伴う土取りとも考えられる⁶⁾。

3期（10世紀後半～中世） 10世紀前半の整地層を掘り込む遺構群であり、掘立柱建物や柵を検出した。柱穴から時期を特定できる遺物が出土しなかったため新旧は不明であるが、主軸方位から建物110・柵113と、柵111・112の2群が認められる。時期は10世紀前半以後である。

4期（中世） 南北溝などを検出した。遺構の時期を示す遺物は出土していないが、層序から中世と推定した。周辺の調査地では、10世紀中頃以後の遺構は希薄化するが、15世紀後半から再び増加する傾向がある。今回検出した遺構も、15世紀後半頃の遺構である可能性が高いと考える。

註

1) 飛鳥池遺跡SE42、平城京右京八条一坊十四坪SE1700の構造については、下記文献を参照した。

鐘方正樹『井戸の考古学』ものが語る歴史シリーズ⑧ 同成社 2003年

- 2) 南 孝雄『平安京右京三条三坊三町跡・西ノ京遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2012 - 23 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2013年
- 3) 島田敏男「飛鳥池遺跡の調査 - 第84次・87次 - 1 84次調査 藤原宮期以降の遺構」『奈良国立文化財研究所年報 1998 - II』奈良国立文化財研究所 1998年
- 4) 井上和人「第三章 第2節 F項 井戸」『平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報第46冊 奈良国立文化財研究所 1989年
- 5) SE80の井戸枠下部には、石組が一部残存していた。
平尾政幸「11 平安京右京北辺二坊・北野廢寺」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1999年
- 6) 平安時代中期頃に、境内を再整備した可能性が指摘されている。
鈴木久史「北野廢寺」『古代寺院と律令体制下の京都府～なぜそこに寺はあるのか～』第19回京都府埋蔵文化財研究会発表資料集 京都府埋蔵文化財研究会 2013年

付表1 掲載土器類一覧表

No.	器種	器形	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	調整	備考
1	土師器	椀A	井戸1	13.6	2.6	-	7.5YR7/6 橙	内外面:ヨコナデ、内面底部:ハケ、 外面下部:ユビオサエ	
2	土師器	椀A	井戸1	13.9	2.5	-	7.5YR7/6 橙	内外面:ヨコナデ、内面底部:ハケ、 外面下部:ユビオサエ	
3	土師器	杯A	井戸1	15.2	3.2	-	7.5YR7/6 橙	内外面:ヨコナデ、内面底部:ナデ、 外面下部:ユビオサエ	
4	土師器	杯A	井戸1	15.8	3.3	-	7.5YR7/6 橙	内外面:ヨコナデ、内面底部:ハケ、 外面下部:ユビオサエ	
5	土師器	杯B	井戸1	15.9	3.5	7.2	7.5YR7/4 にぶい橙	内外面:ヨコナデ、内面底部:ハケ、 外面下部:ユビオサエ、外面底部:貼付高台	
6	土師器	杯B	井戸1	(16.0)	3.2	8.4	10YR6/4 にぶい黄橙(外)、 10YR4/2 灰黄褐(内)	内外面:ヨコナデ、内面底部:ナデ、 外面下部:ハケ→ナデ、外面底部:貼付高台	
7	土師器	杯B	井戸1	17.0	3.5	9.6	7.5YR6/4 にぶい橙	内外面:ヨコナデ、内面底部:ハケ、 外面下部:ユビオサエ、外面底部:貼付高台	
8	土師器	杯B	井戸1	18.0	4.0	8.7	7.5YR7/4 にぶい橙	内外面:ヨコナデ、内面底部:ハケ、外面下部: ユビオサエ→ケズリ、外面底部:貼付高台	
9	土師器	甕	井戸1	22.7	18.3	-	10YR7/3にぶい黄橙	口縁部・頸部:ヨコナデ、内面胴部:ハケ→ユビオサエ、 外面胴部:タタキ→ナデ(?)、外面底部:タタキ→ハケ	スス(フキコボレ)・ コゲ付着
10	須恵器	瓶子	井戸1	4.4	9.4	4.0	2.5Y7/1 灰白	口縁部:ヨコナデ、頸部:絞り痕、胴部内外面: ロクロナデ、外面底部:糸切り痕	線刻
11	須恵器	瓶子	井戸1	-	8.2	3.5	N7/0 灰白	頸部:絞り痕、胴部内外面:ロクロナデ(外面自然 釉付着)、外面底部:糸切り痕	
12	須恵器	瓶子	井戸1	-	7.9	3.6	N6/0 灰	頸部:絞り痕、胴部内外面:ロクロナデ、 外面底部:糸切り痕	
13	灰釉陶器	皿	井戸1	(16.9)	-	-	2.5Y7/2 灰黄(胎土)、 2.5Y6/2 灰黄(釉)	内外面:ロクロナデ→施釉	
14	緑釉陶器	長頸壺	井戸1	9.4	-	-	5Y8/1 灰白(胎土)、 7.5GY8/4 黄緑(釉)	口縁部・頸部:ロクロナデ→施釉、胴部内面: ロクロナデ→釉付着、胴部外面:ミガキ→施釉	
15	土師器	椀杯A	土坑114	12.9	2.3	-	7.5YR6/6 橙	内外面:ヨコナデ、内面底部:ナデ、 外面下部:ユビオサエ	
16	土師器	椀杯A	土坑114	13.2	2.3	-	10YR7/4 にぶい黄橙	内外面:ヨコナデ、内面底部:ナデ、 外面下部:ユビオサエ	内面に油煙(?) 付着
17	土師器	甕	土坑114	15.9	-	-	2.5YR5/4 にぶい赤褐	口縁部:ヨコナデ、内面頸部:ナデ、 内面胴部:コテ調整、外面胴部:オサエ	河内産、スス付着
18	須恵器	杯B	土坑118	18.5	4.4	11.2	N7/0 灰白	内外面:ロクロナデ、外面:自然釉付着、 外面底部:貼付高台	
19	須恵器	甕	土坑118	22.0	-	-	N7/0 灰白	口縁部:ロクロナデ、内面胴部:同心円当て具痕、 外面胴部:タタキ(自然釉付着)	
20	須恵器	長頸壺	土坑118	8.1	20.1	9.4	10YR7/2 にぶい黄橙	内外面:ロクロナデ、外面下部:回転ケズリ、 外面底部:貼付高台	焼成後線刻
21	土師器	甕	土坑119	26.0	-	-	7.5YR7/6 橙	口縁部:ヨコナデ、内面頸部:ハケ→ヨコナデ、 内面胴部:当て具痕、外面胴部:タタキ	
22	土師器	甕	土坑119	28.0	-	-	10YR7/3にぶい黄橙	口縁部:ヨコナデ、内面頸部:ハケ、 内面胴部:板ナデ、外面胴部:ハケメ	
23	黒色土器	杯	土坑119	20.0	6.1	-	5YR6/6 橙(外面)、 10YR4/1 褐灰(内面)	内面:ミガキ、外面:摩耗のため調整不明	A類
24	須恵器	杯B	土坑119	17.8	7.3	10.9	2.5Y6/1 黄灰	内外面:ロクロナデ、外面底面部:ヘラ切り→ナデ 調整、外面底部:貼付高台	
25	須恵器	鉢	土坑119	25.0	13.6	11.8	N7/0 灰白	内外面:ロクロナデ、外面底部:糸切り痕	一部摩耗大
26	須恵器	円面硯	3層	14.7	-	-	N7/0 灰	内外面:ロクロナデ	硯面に墨付着
27	緑釉陶器	椀	3層	12.4	4.1	6.4	10YR7/1 灰白(胎土)、 10Y7/2 灰白(施釉)	内外面:ミガキ→施釉	京都産
28	緑釉陶器	蓋	3層	-	-	-	2.5Y8/1 灰白(胎土)、 7.5Y7/3 浅黄	内面:ミガキ→施釉、外面:施釉	外面:陰刻花纹、 透孔、東海産
29	緑釉陶器	蓋	3層	-	-	-	2.5Y8/1 灰白(胎土)、 7.5Y7/3 浅黄	内面:ミガキ→施釉、外面:施釉	外面:陰刻花纹、 東海産
30	二彩	蓋 (ツマミ)	1層	-	-	-	10YR8/3 浅黄橙(胎土)、 7.5GY5/4 黄緑(釉 濃い部分)、 7.5GY8/2 黄緑(釉 浅い部分)	外面:施釉	

付表2 掲載瓦類一覧表

No.	種類	文様	遺構名	色調	焼成・胎土	調整	備考
31	軒平瓦	飛雲文	土坑114	N4/0 灰	良・硬質	凸面:タタキ、凹面:布目→ヨコナデ、 側面:ヘラケズリ	直線顎・凸面に赤色顔料付着、 平城宮6802型式
32	軒平瓦	唐草文	井戸1	5YR7/6 橙	不良・軟質	凸面:ナデ、凹面:布目、 側面:ヘラケズリ→ナデ	直線顎・磨滅激しい、 長岡宮7722F型式
33	軒平瓦	唐草文	土坑2	N4/0 灰	不良・軟質	凹面:布目、側面:ヘラケズリ→ナデ	直線顎・磨滅激しい、 長岡宮7722F型式
34	軒平瓦	文字	1区攪乱	N5/0 灰	良・硬質	凹面:ナデ、側面:ヘラケズリ	内区に「本」の銘
35	平瓦	-	土坑114	2.5Y5/1 黄灰	良・硬質	凸面:幾何学文タタキ、凹面:布目	
36	平瓦	-	土坑114	10YR5/2 灰黄褐	良・硬質	凸面:縄目タタキ、凹面:布目、 側面:ヘラケズリ	
37	平瓦	-	3層	2.5Y6/2 灰黄	良・硬質	凸面:縄目タタキ、凹面:布目	
38	平瓦	-	井戸1	10YR7/4 にぶい黄橙	不良・軟質	凸面:格子タタキ、凹面:布目、 側面:ヘラケズリ	
39	平瓦	-	3層	2.5Y6/2 灰黄	良・硬質	凸面:格子タタキ、凹面:布目、 側面:ヘラケズリ	
40	平瓦	-	土坑114	7.5YR7/4 にぶい橙	不良・軟質	凸面:格子タタキ、凹面:布目、 側面:ヘラケズリ	
41	平瓦	-	3層	10YR7/3 にぶい黄橙	不良・軟質	凸面:格子タタキ、凹面:布目、 側面:ヘラケズリ	

付表3 掲載金属製品・銭貨一覧表

No.	種類	形態	遺構名	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	備考
42	鉄釘	折釘/叩折釘	土坑119	8.4	2.7	0.7	先端部欠損
43	銭貨	皇宋通寶	1区現代盛土	2.4	2.45	0.1	篆書体
44	銭貨	文久永宝	1区攪乱	2.75	2.75	0.1	草書体、略宝、穿から「永」一部欠損

圖 版



1 1区第2面全景（北から）



2 2区第3面全景（北から）



1 井戸1 (西から)



2 建物110、柵113 (東から)



出土土器類

報 告 書 抄 録

ふりがな	きたのはいじ・きたのいせき							
書名	北野廃寺・北野遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2016-16							
編著者名	中谷正和							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2017年8月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
きたのはいじ 北野廃寺 きたのいせき 北野遺跡	きょうとしきたく 京都市北区 きたのしもはくばいちょう 北野下白梅町 41番地	26100	160 161	35度 01分 36秒	135度 43分 52秒	2017年2月 15日～2017 年3月31日	181㎡	建物新築 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
北野廃寺	寺院跡	飛鳥時代 ～奈良時代			瓦類		平安時代中期の井戸を検出した。	
北野遺跡	集落跡	平安時代	井戸、土坑、建物、 柵		土師器、黒色土器、須 恵器、緑釉陶器、二彩、 灰釉陶器、瓦類、鉄釘、 銭貨			
		中世	溝					
		江戸時代			瓦類、銭貨			

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2016-16

北野廃寺・北野遺跡

発行日 2017年8月31日

編集
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961